國語研究

方言研究の過去・現在・未來

橘　正一

方言研究は、過去に於て、いつ頃、一番、盛であつたか——これを知るためには、方言書類の一年間に於ける發行冊數を見るのが一番よい。そこで、試みに「愛書趣味」四卷二號に掲載された東條操氏の「方言刊行書目」を見ると、明治元年から十二年までは皆無、十三年には沖繩對話二冊、二十年に一冊、二十一年に二冊、二十二年に一冊、二十四年に一冊、二十五年に一冊、その後暫らくとぎれて、二十九年に一冊、三十年に一冊、三十一年に二冊、三十二年に一冊、三十三年に二冊、三十四年に二冊、この頃から急に多くなり、三十五年八冊、三十六年五冊、三十七年五冊、三十八年二冊、三十九年五冊、四十年四冊、四十一年三冊、四十二年二冊、四十三年四冊、四十四年三冊、となつてゐる。無論、これに洩れた資料も多い事だらうが、比例を知る爲には之で十分である。では、なぜ、明治三十五年以後、方言研究が盛んになつたかといふに、これは國語調査會の活動がその刺戟となつたと認められる。即ち、明治三十五年は、國語調査會が初めて設立された年である。同會は「音韻調査ニ關スル事項」一冊「口語法調査ニ關スル事項」一冊を印刷して、三十六年九月に、之を各府縣に送つて、調査を頼んだ。これが直接の刺戟となつて、かくも多くの方言誌の發行を見たのである。その證據には、これらの方言誌は、大抵、教育會や學校から出てゐる。これより先、明治三十年、東京帝國大學國語研究室に於て、時の文科大學長、外山正一氏の名によつて、各縣の知事に、方言取調べを頼んだ事があつたといふから、遡れば、源は遠

いのであるが、とにかく、この時代に、ある機運が動いてをつた事は察せられる。

明治三十八年には「音韻調査報告書」及び「口語法分布圖」、翌年には「口語法調査報告書」及び「口語法分布圖」が國語調査委員會から出版されたが、これは、各府縣からの回答を整理したものである。なほ、明治三十七年には、保科孝一氏の編纂した「方言採集簿」が國語調査委員會の名によつて出てゐる。

大正時代の方言刊行書は二十八冊。一年平均二冊で、之を明治三十五年から四十四年までの刊行書、四十一冊一年平均四冊に比べれば、半分にしか當らない。しかしこの時代には、郡誌の出版が非常に多く（殊に大正十二年頃は、郡役所廢止の事情の爲に、一番、多く、郡誌が出た）その郡誌の中には、方言をのせたものが多い。

昭和になつてからは、二年に、東條操氏の大日本方言地圖、靜岡縣警察部の全國方言集、再版物では出雲方言考、田邊方言等、三年には、東條操氏の方言採集手帖、四年には秋田方言、富山市近在方言集、鹿兒島語法、和歌山縣の方言訛語矯正便覽、方言集覽稿の群馬縣方言、長野縣方言等、五年には九月までに、方言集覽稿の福島、栃木、三重、福井、奈良諸縣、言語誌叢刊の蝸牛考、南島方言資料、臺灣方言集、琉球語、田中正行氏の肥後方言考、水口清氏の秋田の植物方言、杉山正世氏の愛媛縣周桑郡丹原地方言語集、同氏の埼玉縣川越市近傍言語集、桂又三郎氏複刻の岡山縣吉備郡の「方言訛語調査書」桑江良行氏の「標準語對照、沖繩語の研究」等があり、又近く出ようとしてゐるものに、岩倉市郎氏の「東界島方言」宮良當壯氏の「八重山語彙」嶋村知章氏の「岡山市附近の方言」同氏の「岡山縣各郡誌掲載の方言集」等がある。方言書類出版の數では、明治三十五六年の盛期をしのぐ程である。しかも、今日の方言書類は、十中八九分までは、個人の著であつて、明治時代の樣に、教育會や學校から出るものは、極めて、少ないのは注意すべき現象である。では、これらの人々は、どういふ種類の人であらうか。これを考へて見るのも無用ではあるまい。

今日、方言研究家には三種類ある。

第一、國語學研究家。これは多かりさうで實は少ない。これは、國語學に關する書物が、極めて、少ない事によつてもわかる。「國語國文の研究」第四十四號によると昭和四年間の國文學關係の出版書は、六百冊もあるさうだが、その内國語學に關するものは二十四冊しか無い。

しかも、その二十四冊は、アリンス國辭彙、ローマ字日本語の文獻、アイヌ語より見たる日本地名研究、支那古韻史、日鮮同祖論の樣なものを含めてゞある。

古典の研究者が、なぜ方言を顧みないかと言へば、それは、その必要を認めないと言ふのではなくて、それに趣味を持たぬのである。古典を愛好する程の人は、みな古典趣味、尙古趣味の人々であるから、現在の事實、書かれざる史實に趣味を持たないのは當然である。且、今日の樣に學問が知識階級の社交用具と見られる樣な時代にあつては、人の知つてゐる事を知らぬのは恥であるが人の知らぬ事を知らぬのは、何等の恥でもない。言はゞ學問も亦、一種の流行であり、そして、方言は、まだ流行以前なのである。

第二、鄉土研究家。これは、いやしくも、自分の村に關する事ならば、殿樣の話でも、偉人の傳記でも、遺物でも、遺跡でも、土俗でも、傳說でも、何でも集めようとする人々である。郡誌や村誌に載つてゐる方言は、かういふ人の集めたものである。しかし、もと〳〵、彼等は、鄉土愛から出發してゐるから、他郡、他縣の方言には、少しの興味もなく、方言雜誌が出ても、讀者にならうともしない。彼等は、結局採集家であつて、研究家ではないのである。

第三、土俗研究家。土俗研究家の興味は、鄉土研究家とは違つて、國境を超越してゐる。彼等は、自分の村の事は、もとより、琉球の事でも、アイヌの事でも、アフリカ土人の事でも、いやしくも、面白い話なら、何でも知らうとする。たゞ、方言は、土俗や傳說とは違ひ、無味乾燥であるから、今まで、彼等の注意を惹かなかつたのである。しかし、土俗と方言との關係は、柳田先生の論文を見た者は、その豫想以上に、密接な事におどろくであらう。例へば盛岡では、キョーギョーシの事を方言で、チョンチョンズガラガラズといふ。これは其鳴き聲

チョンチョンズ　ガラガラズ
下駄片足に　草履片足

から來た名である。昔、この鳥は宿屋の女中であつたと云ふ。ある夜、その家に、侍が泊つた。あくる朝、立つ時になつて、片方の草履が、どうしても、見えない。侍は怒つて、その女中を切り殺した。すると、その女中は鳥となつて、川原に飛んで行つた。だから今でも

草履片足、事々し、とう〳〵私の首切つた。首切つた。アタタチチ、アタタチチ

と啼いてゐるのだと言ふ。これは、佐々木喜善さんが岩

乎縣遠野地方で採集した昔噺である。これによれば、ギョーギョーシも、實は「仰仰し」で「事々し」と同じ意味の言葉から來たかもしれない。

あるひは言ふ、ヨシキリは、村きつての姫ら娘であつた。ある夏の夜、田原の葭の中で、いたづらをしてゐると、誤つて、葭で、尻を切つた。それで

けつ切つた、けつ切つた、引くり返つてぶつ通し、四五六源治の仇情、けつ切つた、けつ切つた、アタチチ、アタチチ、アアイチテ、アアイチテ！

と啼くのだとも言ふ。これも、佐々木さんの採集であるか「葭切り」といふ名も、或ひは、こんな所から來てゐるのかも知れない。

次に、方言學者の列傳には入つて、先づ、柳田國男先生。柳田先生の方言研究は「郷土研究」の方言欄でも見受けられるが、大論文が續々として、發表される樣になつたのは、昭和二年四月からである。これも日錄をあげるのが、一番早い。

蝸牛考	人類學雜誌	二年四月より
方言と昔	アサヒグラフ	二年四月六日より
私生兒を意味する方言	民族	二年五月
農民史研究の一部	斯民	二年六月より
民間些事	近代風景	二年七月より
蓮の方言など、地上樂園		二年七月
梟の啼聲	家の光	二年八月
小さき者の聲、信濃教育		二年九月より
末子を意味する方言、民族		二年九月
産婆を意味する方言、民族		二年十一月
交易と贈答	同	三年一月
虫の名の方言	同	三年一月
方言の小研究	同	三年三月
玉蜀黍と蕃椒（方言の小研究二）同		三年五月
虎杖と土瓶（方言の小研究三）同		三年七月
蟷螂考	土のいろ	三年九月

柳田先生によつて、方言は、初めて、學問的に研究されたと言つてよい。今までの研究法は、比較といふ事を、全然、無視して、自分の知る村の言葉だけを解決しようとしてをつたゝめに、獨斷を免れなかつた。これに反して、柳田先生の方法は、語原は第二として、先づその分布を知るといふ事を第一とし、各地の方言を蒐集し、分類した。だから、たとへ、その語原說に服しない者があつたとしても、かくして、得られた、某語の方言集なり方言地圖なりは、資料として永久に役立つわけである。

しかし、柳田先生が、方言の分布を地圖の形で發表されたのは、最近、單行本として出た「蝸牛考」が最初である。

題目について見れば、さすが、土俗學者らしい好みが伺はれる。說明の方法に於て、一歷、さうである。例へば蟷螂を、ヲガメ、ヲガマニヤトーサンといふのは「拜め」「拜まにや通さん」といふ子供の遊び言葉から來たと言ひ、菫をスモトリバナ、カギビキなどゝといふのは花と花とをかけ合せて遊ぶ事から來たといふ如き、その一例である。

東條操氏は、方言學の先覺者であるが、東條氏のこれまでの御仕事は、主として、目錄の編纂であつた。それは次の樣な雜誌に發表されてゐる。

鄉土研究	四卷七號	（全國）
民・族	一卷五號	（東北地方）
國語教育	一卷一號	（全國）
同	十一卷一號	（琉球語）
同	昭和二年三月號	（全國）
愛書趣味	四年二號	（全國）
方言と土俗	第一卷一號、二號、三號、四號	

（鄉土誌方言資料目錄）

方言採集手帖　（單行本、全國）

東條氏の「南島方言資料」の序文によれば、同氏は全國の方言を、これと同じ形式で、順々に、發表するつもりであつたらしいが、惜しいかな、十二年の震災で、藏書を、全部、燒いてしまつた。然るに、最近になつて、大田榮太郎氏が、全國方言の集大成を企て「方言集覽稿」と題して、謄寫版ずりで發行し、既に群馬、長野、福島、栃木、岐阜、三重、福井、奈良の諸縣を終り、今、和歌山縣と石川縣を編纂中である。東條氏と言ひ、大田氏と言ひ、自分一箇の研究は後廻しとして、長く研究者のよりどころとなる樣な、かういふ地味な仕事を企てられたのは、後進に取つて大いなる幸である。

現在の方言研究の特徵の一つは、方言分布圖の作製である。音韻や口語法の分布圖は、早く、國語調査委員會から出版され、又、近くは東條氏の大日本方言地圖もあるが、單語についての精密な地圖は「岡山文化資料」第二卷第五號（昭和五年五月五日發行）に揭載された、博物學者、佐藤清明氏の「岡山縣に於けるイタドリの方言分布論」の附圖（一九三〇年二月二十一日作製）が公表されたものとしては、最初のものである。同氏は、同じ雜誌の第三卷第二號に「岡山縣に於ける蝼地獄の方言分

布論」を掲げ、精密な分布圖を添へてゐる。これとは獨立に、山本靖民さんは、私の編輯發行する雜誌「方言と土俗」第一卷第五號に、島原半島に於ける甘藷の方言分布圖を發表してゐる。兩氏とも、柳田先生の指導を受けた人で、殊に、佐藤氏は始の論文の冒頭に「此の一篇を斯學の先覺者、柳田國男氏に捧げて、尊敬の意を表す」と獻辭を書いてゐる程である。その外、沖繩縣の宮良當壯さん、岡山市の桂又三郎さん、愛媛縣の杉山正世さんも、自分の鄉里を中心として、方言の分布をしらべてゐる。

單に、自分の村の方言だけを報告するのと違つて、分布をしらべようとするには、自分で、わらじ掛けで歩くにしても、また、手紙で、問ひ合せるにしても、少なからぬ時間と勞力と財力とを要する事であるから、よほどの熱心家でなければ、できぬ仕事である。今日まで方言分布圖が現はれなかつたのは、つまり、それだけの熱心家がなかつた證據である。然るに、この最初の熱心家が國語學者の側から現はれずに、土俗學者や博物學者の側から現はれたのは、國語學者に取つて、決して名譽ある事ではない。無論、將來は國語學者の側から、續々と方言研究家が現はれる事を期待し確信する者である。(完)